ほほえみ通信　NO.43　萬霊山松原寺

平成20年7月1日発行

本来お釈迦様が説かれた教えは、一切の衆生を差別なく、全て救おうという思想が根底にあり、そこに従来の宗教との大きな違いがありました。たとえ罪を犯した者でも悔い改めれば必ず救われると言うのです。男女・貧富・賢愚・美醜、その他一切の差別を認めず、同じように救われると言うのです。

従って、一緒に祀ってはいけないとか、縁のない者を受け入れてはいけないなどというのは、大乗仏教（従来の部派仏教が出家者中心・自利中心であったのを小乗仏教として批判し、それに対し、自分たちを菩薩と呼び利他中心の立場をとった。東アジアやチベットなどの北伝仏教はいずれも大乗仏教の流れを受けている）の精神に根本的に背いており、むしろそういうものを積極的に受け入れ、同化していくことこそが大事なのだと思います。

我々が読経の後で唱える回向の中に、「願わくばこの功徳を持って普く一切に及ぼし・・・」とか「有縁、無縁三界の万霊に回向する」とあるのはその為です。

戦時中「滅私奉公」とか「勤労奉仕」とかのスローガンがよく揚げられましたが、あれは、時の為政者や軍部が国民を動員して只で奉仕させる為の手段でしたが、ここで言う、**衆生の為に尽くすということは、他から強制されたり、相手から求められてするのではなく、自分が心から自然にそうしたくなることです。それには、自分自身が変わらなければなりません。その根底にあるものは、慈悲の精神です。**

自分の利益になることを一切捨ててただ人々の為に尽くすというのは、**菩薩の行為**であって、我々凡人にはとてもできることではないと、多くの人は思うでしょう。正直言って、恥しいことですが、私にもそこまで徹することはまだ出来そうにありません。しかし、いきなり菩薩と同じ心境にはなれなくても、**自分のできることの中から少しづつでも始めていくことは可能だと思います。**

自分の貪り（むさぼり）の気持ちを抑えて人に譲ったり、人の過ちを許したり、喜びや楽しみを人々と分かち合ったり、人に優しい慈しみの言葉をかけたりすることは、誰にでもしようと思えばできることではないでしょうか。

ただ、その場合、相手の立場や気持ちを考えず、一方的に善意を押し付けたり自己満足の為にするのでは何にもなりません。ましてや、自分のしたことを人に誇ったり、報いを期待するのでは何の意味もありません。**さりげなく、誰がしたのか分からないようにするのが本当の善行であり、他人の喜びを自分の喜びにできたら本物だと思います。**